

COVID-19 感染症流行禍における老健アルボースの挑戦

～利用者の心を支えたい～

相場 健一¹⁾

1) 公益財団法人脳血管研究所 介護老人保健施設アルボース

[はじめに]当施設、アルボースは、超強化型老健として在宅復帰、在宅生活支援に積極的に取り組んできた。しかし、COVID-19 感染症蔓延の影響により、当施設でも面会および入退所の制限をせざるを得ず、平均在所日数は流行前の 106.8 日(2018 年度)から 203.7 日(2020 年度)と延長し、施設運営上の大きな問題となった。このような状況の中、COVID-19 感染症流行禍において利用者にとってよりよいケアを提供するために「できることをできるかぎりやろう!」の精神で、工夫を凝らして取り組んだ。今回、これらの取り組みについて紹介する。

[ICT・介護ロボットの活用]COVID-19 感染症対応としては、人と人の距離を離すことが求められる。一方、ケアにおいては利用者に寄り添うことが重要である。当施設では補助事業により ICT・介護ロボット導入を進め、施設内の Wi-Fi 環境を整えることができていた。これを利用し以下のような取り組みを行った。①家族の面会制限に対応しタブレット端末を使用したオンライン面会を開始した。②個々のスタッフにインカムを導入。スタッフ間のスムーズな情報共有はきめ細やかな利用者対応を可能にした。③予測型見守り機器の導入は、的確な利用者行動の予測が可能となり、安全なケア提供に繋がった。④施設内の勉強会は動画視聴方式、症例発表会はハイブリッド方式で企画した。⑤表現アートセラピーはオンライン開催に変更して実施した。これらの試みは、職員が ICT を習熟するよい機会になった。

[利用者との直接的繋がり]利用者に対する日常ケアでは、併設病院の感染管理認定看護師の協力を得て安全にケアができる体制を整えた。例えば、入浴ケアでは脱衣室や浴室が混み合わないよう人数制限を設けた。その結果、利用者の待機時間が短くなり、職員も落ち着いてケアができるなど思わぬ改善に繋がった。人が集まるイベントは開催が困難、利用者は外出も許可できなくなった。夏祭りの規模を縮小し施設内部署別開催に変えて実施したところ利用者、職員ともに大いに楽しむことができた。音楽療法は、集団音楽療法から小集団音楽療法へ変更して継続した。このように、様々なケアの場面で利用者との繋がりを保てるように工夫した。

[家族との直接的繋がり]当施設では、利用者の在宅生活支援のためにも、家族はケアチームの一員ととらえている。洗濯物の交換等で家族が来所したときは、職員が必ず利用者の日常の様子について丁寧に伝えることとした。また、日々の利用者の姿を撮影し、手紙とともに写真を届ける取り組みは、家族にとっても喜ばれた。これらの試みを通して家族に働きかけ、家族、利用者、職員の繋がりが希薄にならないよう務めた。

[まとめ] COVID-19 感染症の流行により、利用者に対するケアは「人と人との距離を離す」ことを重視せざるを得なかった。しかし、ケアの本質は寄り添うことである。適切な感染対策を実施しながら人と人との繋がりを大切にしたケアの実践は、私たちにとって大きな挑戦であった。私たちは、利用者、家族、職員のチームの繋がりをしっかりと保つキーパーソンとなり、新しい時代のケアを提供していきたい。